# 藏の中

# 藏(くら)の中(なか)

緊英閣刊

宇野浩二著

大正八年十二月二十日印刷
大正八年十二月二十四日發行

定價金貳圓貳拾錢

中の藏

著者　宇野浩二

發行者　東京市牛込區横寺町四十三地　後藤誠雄

印刷者　東京市牛込區市谷谷町九三　島田和喜太郎

印刷所　東京市牛込區市谷谷町九三　サンデー社

發行所　東京市牛込區横寺町四十三番地　聚英閣
電話番町四六二
振替東京四七八六九

# 目次

近松秋江論（序に代へて）……一―五五
藏の中……五七―一五八
屋根裏の法學士……一五九―一八六
轉々……一八七―二八四
長い戀仲……二八五―三八〇

# 近松秋江論

（序に代へて）

## 一

先達て、或雨の降つた晩のこと、友人のS――と二人で神樂坂の落語の寄席に出かけたことがあつた。既に夏場に入つてゐるので、客足のうすい上に、殊に蒸暑い晩のことでもあり、それに雷鳴さへ催してゐたので、客は數へる程しか來てゐなかつた。見たところ彼等は、それ〴〵階級や職業は違ふのだらうが、兎に角我々同樣のよく〳〵退屈な人間に違ひなかつた。落語家の言葉ではないが、しかし斯ういふ人間こそ彼等から言ふと客の中の客で、それと同時に皆一通りの寄席通なぞといふ連中なのであらう。早い話が、僕たちの坐つたすぐ傍に



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

陣取つてゐた二人連の藝者だ、彼等は「電話が掛つて來たら呼びに來て頂戴な、」なぞと婢やに言ひ殘して、お神の留守の間にそつと抜出して來た者たちで、今夜ふたりは稼業もさう忙しくないだらう位にたかをくゝつて、又實にこんな心掛の女たちに限つて抱主の持てあましてゐる賣れない連中で、その癖割合に頭がよくて、お茶ッぴいの中のお茶ッぴいで、されば、寄席なぞは一簾の通で、お喋りと間食とを事とする、どうせお座敷なぞと言つても十二時過を殆ど專門とする連中に違ひないのだ。

丁度僕たちが入つて行つた時、さういふ一筋繩で行かない少數の客を相手に、高座で喋つてゐた男といふのは、何といふ名か知らないが、どうせ無名の、今年になつて漸く落語家の末席に列し始めた位の男に違ひなかつたが、大阪辯で、

その時は眞打が小南だつたから、多分彼の弟子だらう、下手な話をつゞけてゐた。その場の樣子で、僕は察したのだが、彼はもう大分の時間さうして話しつゞけてゐるらしかつた。が、それには、どうせ時間つぶしの客たちは、殆ど耳もかさずに、めい〳〵勝手に煙草をすつたり、小聲で話し合つたりしてゐた。高座の男にも無論それは分つてゐるらしい、けれども、彼は誰も輕蔑して聞いてゐないとは知りながら、これも職業(なりはひ)だ、これが修業だと觀念して、やつてゐるのに違ひなかつた。

それから尙十五分以上もその藝人は、後につゞく者が來ないと見えて、覺えた話のありつたけを、何でも、その時は一人の男が二人の女房——つまり本妻と妾とを二階と階下とに住ましておいて、その兩方の嫉妬の角に挾まれて困り

ながら、加藤左衞門なら高野の山に遁れるところだが、遁れもせずに、毎日梯子段を上りつ下りつして難儀してゐるといふやうな話を、つゞけてゐたが、突然、又雷が鬼怒川の何とかにでも落ちたのだらう、急に電燈が消えたのだ。けれども、無論、高座の藝人は暗がりの中で、膝頭で高座の床を叩いたりして、その話中の男が梯子段を上る音を摸ねたりなぞしながら、話をつゞけてゐる。賢明な——無論、雷雨の晩に寄席に來るやうな人たちは、晴天の日に夫婦や家族同伴で來るやうな人たちから思ふと、ずつと賢明に違ひない、——客たちは、それでも別に大きな聲を立てはしなかつたが、さうだからと言つて、その藝人の話に聞入つてゐたのでは無論ない。

さて元もと寄席の天井は普通の家よりは大分高いから、豫備の瓦斯をともす

のに仲々容易でないと見えて、法被を着た男たちがあちこちと奔走した末、それに亦十分ほどもかゝつて、やつと瓦斯がついたかと思ふと、今度は二三分したらうまく故障が直つたと見えて、ぱつと電燈がついたのだ、それだけのことは、口で言へば何でもないやうだが、藝人にとつては、まるで手をかへ品をかへて話の邪魔をされてゐるやうなものである。彼の顏つきは次第に變に、神經的になつて行つた。それに、まだ駈出しの彼には、乏しい話の種が盡きかかつて來た樣子だつた。それにも拘らず、まだ後詰の者が來さうにない、運惡く、それに乘つて後詰の者が通つて來る筈の電車が、先の停電で止まつたらしいのだ。

彼は高座で無暗に湯を飲みながら、益々神經的に顏を歪めて、時々救を求めるやうに眞赤に充血した目をして、樂屋の方を窺うてゐる。僕はもう彼の樣子

が見てゐられなくなつて來た。その時、彼は突然決心したやうに、

「どーんと一つ、三味線に景氣をつけて貰うて、呶鳴りませうか？」斯う叫んで歌ひ始めた。その歌が、今迄下手な話を持ちあぐみながらも歌はなかつた理由が分つた、お話にならない程まづいのである。從つて、歌の數なぞも我々素人よりも知らないらしいのだ。せい〳〵牛込か神田邊の下宿にごろ〳〵してゐる、不良書生位の歌の知識を以て、さて彼が歌ひ出したのは、都々逸を十ばかり、それも盡きて、さのさを五ツばかり、ゐんかいな節を三ツばかり、それから「東雲（しのめ）のストライキ」を二度くり返して、やつとすゐりよう節を三ツやつた時に、後詰の藝人が樂屋にくり込んだらしかつた。

「何とか何とか、やつとせ。ァヽすゐりよう〳〵。

やつとせ、推量々々、推量々々、と彼としては「やつとせ」と「推量」とにせい一ぱいの意味を含めて、額にしつとりと膏汗をかいて、絞り出すやうに斯う呟鳴りながら、お辭儀をして、樂屋に歸つて行くその顏つき、姿、腰つき！（人生藝人たることの、あゝ何といふ辛さだ！）それを見た時、僕のみならず、そこらにゐた例の一筋繩で行かぬ客たちも、皆無言で、ぽかんと口を開いて、茫然とした形で彼を見詰め且見送つた。

彼の姿が樂屋に消えた時、僕はほつと息をついた、僕自身も助けられたやうな氣がしたのであつた。

「どうだ？……」そこで稍々あつて僕がS――に言ふと、彼は、彼も亦感無量であつたのだらう、無言のまゝで僕の掌を開いて、指でそこに「シラカバ」と書



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

いた。

「何だい、シラカバが？」と僕が聞くと、

「彼等はあの苦勞を知らないからね……？」とS――は眞面目なやうな、お道化たやうな調子で言つた。

「まつたくたね、」としかし僕は眞から底から同感した。

引合に出した白樺出の諸君には氣の毒だが、無論、僕なぞがこんなことを言つたからとて、自信深い諸君はすき好んで、何も明日からそんな卑しい浮き苦勞をしなくてもいゝし、又しよう筈もあるまい、諸君は諸君で、立派に行く道があるのを、僕とて認めない者ではない。たゞ斷つておきたいのは、文章の修辭上、この一文に於いては對稱法に依つて、心ならずも諸君及び諸君の藝術を

無理に少々こき下すかも知れない、それは又他日埋め合はせをするとしてこゝでは大目に見免して貰ひたい。

さて、それに就いていつか有島武郎が、何もわざ〳〵苦勞をしたり經驗をしたりしなかつたことを自分は悔いない、或時カントの許に、アルプス探險家が一個の鑛石を持つてやつて來て、それをカントに見せたところが、彼はそれをつく〳〵と眺めた後、その石の成分は言ふ迄もなく、それのあつた場所から、その附近の光景までを目に見るやうに說明して、實際の探險者を驚かしたといふ話がある、自分たちは取りも直さずそのカントの流儀だ、といふやうな意味のことを、何かの雜誌に書いてゐた。誠にもつともな言葉である。はア、斯ういふ人は斯ういふ風に考へて、斯ういふ風に言ふものか、と僕は實は非常に感心

した。恐らく、僕にしても、有島武郎だつたら、さういふに違ひない。

ところが、こゝでは、武郎ならぬ僕が、先の對稱法で言ひたいのは、苦勞の經驗のない人や、さういふ人の小說よりも、その反對の人や、さういふ人の小說の方が、どうも一段面白いといふことである。常識的だといつて嗤ふ人は嗤へ、僕にはやつぱり身その境にあつて、色々と酸いも甘いも嘗めた人や、さういふ人の小說の方が、何といつても學問や空想でやつてゐるそれ等よりは、どうも沁々した味があると言ひたいのである

藝は磨くに越したことはない。無論、それは手先や口先を磨くことではない、殊に文學は中學生の作文や、政談演說と事變り、その藝を磨くといふことは、筆を練ることではなくて、自分自身を練ることである。具體的に言ふと、根さ

へ盡きねば、金はあるのだから、決して潰れることのない同人雜誌に、何を書いても、何をしても、別に誰に遠慮はいらない、卑しいことを言ふやうだが、生ある限り鼻の下のお祭に事缺く憂は少しもないといふやうな境遇では、やつぱし餘りいゝ磨きが掛らない、と僕は思ふのである。みながみな、どの作もみな、さうだと言ふのではないが、一部の白樺諸君の小説は、僕には、どうも、今言つたやうな狀態の下で、さしづめ人間の色んな苦勞を材料にすることが出來ないから、書物や空想の方から考へ出しよい、人道主義などいふ主張を材料にした、即ち小説本來の目的から言ふと、第二義的なものが多いやうに思へて仕方がないのである。(無論、これも大分先に言つた對稱法で言ふ言葉だから、諸君ゆめ〳〵むきになつて怒るべからず。)

そこで、賢明なる諸君は、この結論として僕が何を言はうとするか、大凡察しられただらう。即ち先の寄席の落語家の苦勞に沁々同情した僕は、ひいて思を文壇にやる時、僕の頭に誰よりも先に、君は實に苦勞をしたなア、と肩の一つも叩いて、慰めの言葉を以て報いたい人として、近松秋江を思ふのだ。

（こんな風に考へて來れば、諸君、近松秋江が近頃時々、若い所謂苦勞の足りない作家なぞに對して、躍氣になつて食つてかゝるやうな文章を書いて、ひとりで醜い程いら〳〵して見えることがあるのも、見ツともないと一概には叱れない、同情に値するではないか？）

二

近松秋江！

その後はしばらく。御近況は如何？――坊間傳ふる所に依れば、君は今京都で、『葛城太夫』と世帶を持つて、味た日を送つてゐるとも言ふし、或ひは又例に依つて尾羽うち枯らして、君のその見得坊がぼろ〳〵の着物を着て、持つ筆を運ばす氣力はおろか、それだけの肉體の力さへ衰へて、眞に骨と皮とになつてゐるとも言ふ、如何？

（餘り面識もない、先輩の君に向つて、殊に餘りな苦勞をし過ぎた番頭が、生意氣な小僧を憎むやうに、人の物の言ひ方なぞをひどく氣にする君は、こんな禮のない口のきゝ方を僕等がすると、或ひは腹を立てるかも知れないが、言ふ迄もなくこれは對話ではなく、一種の文章と見て、許し給へ。）



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo